

◆ 巻頭言

書くことと共同学習

矢口 悦子

日本の女性たちは実によく「書いてきた」と思う。国際婦人年(1975年)の翌年から大学生活を始めた私は、教育学を専攻していたために、生活綴り方や生活記録というような言葉を学んだが、人々が生活や運動の記録を残すことを当たり前のことのように受け止めていた。そして、「共同学習」という仲間と共に話し合うことを軸にした人々の学びに、ごく自然の成り行きのように辿り着いた。

1980年代、共同学習という言葉を使用していた場が主に2つあった。すなわち、戦後何度目かの高揚期を迎えていた青年団の学習活動と、公民館などで取り組まれた婦人学級を始めとした女性たちの学習の場である。私は、幸運にも、その両方にかかわらせていただく機会を得た。青年団では、自らの生活や活動を記録したレポートを持ち寄り、共感しつつ読みあい、それを基に皆で共通の課題を探り、運動への道筋を考えあっていた。女性たちの学びの中では、「共同で書く」という営みが既に試みられていた。「私たち」を主語として共通の事実を見極め、メンバーが納得する言葉に置き換えていくという気の遠くなるような実践である。

民主主義社会の原理として大学で学んだ「共通の事実」というようなものに、そのような歩みで果たして辿り着くことができるのか、そこに見えない形の先導や権力性が忍び込むことはないのか、個を抹殺する危険性が生まれはしないか、というような批判的議論にも参加した。それはつまるところ人間理解の哲学を引き出す、ずいぶん深い営みであったと思う。

短くなった鉛筆を握りしめ、裏紙や大学ノートに思いを綴った女たちの一行の重さに思いを馳せながら、書くことの意義を改めて考える。書くこと、共同で書くこと、そして日常生活を哲学し、深く学ぶことを忘れてはいけないと今も自戒する。



PROFILE

矢口 悦子
(やぐち えつこ)

東洋大学文学部教授。博士(人文科学)。専門は、社会教育・生涯学習。主な著書としては、『イギリス成人教育の思想と制度—背景としてのリベラリズムと責任団体制度』(新曜社、1998年)、『女性センターを問う』(共著、新水社、2005年)、『イギリス労働者教育協会(WEA)の女性たち』(翻訳、新水社、2009年)など。